住民参加の有効性と課題：事例2

——大田区くさっぱら公園——

Case Study 2 “Kusappara Park” in Oota-ward

下中 菜穂* 赤坂 英夫**

Naho SHIMONAKA Hideo AKASAKA

触発する風景—「くさっぱら公園」づくり、住民からみると

下中 菜穂

何を「参加」とするか

●「公園予定地」の看板を見つけて、みんなに「やろうよ」と声を掛け、企画書を作ったのが、1991年の5月だから、今年でもう6年目なんだ。

▲早いもんだね。ある程度、落ち着いてきたかなとも思うけれど、あいかわらず、地域や行政とのトラブルはあるし、忘れたところに、突然いろんな事が起こるね。

■と、言おうか、そういうことが「あって、あたりまえ」で、「何事もなく」じゃあ、管理のための管理だね。何かあれば、そこから、社会のいろんなこと見えてくるし、具体的な事で、考え方や生き方の違いが見えてくる場所って、他にないから。何かあるとはりきっちゃうところもある。それがあるから、やってるようなもの。面白いよ。

●ところで、今回、またもや『住民参加』の実例として、登場して欲しいというリクエストがあったわけなのだけど、あなたたちのやってることが、『住民参加』なんですよ。と言われると、どうも居心地悪くて「なんか違うみたい」という気がずっとしているんだ。どうしてだろう？そのことずっと考えてるんだ。

■それだけ世の中が『住民参加』ということを書きざるを得なくなっているのではあるんじゃない？。ただ、「参加」というと、公園作る前に何回か集めて意見聞く。その手法がワークショップで…とかいうほうにすぐなるけれど、この公園でいえば、ほら、すぐ文句いってくるあのおじさんとか、時々たむろしてる青少年とか、みんなこの場に「参加」してるんだと思う。そういうのは「参加」と見ないで、あっては困るものでしょ。初めからさ。

●名前を公募したり、デザインゲームに参加したりって、何かこの範囲でなら「参加」してくださいね。という枠組みがどうしても見えちゃう。そういうのって、「本気」に

なれないところあるよ。

▲公園のことに限らず、最近の社会の傾向として、一見自由でなんでもできるみたいだけれど、規制の形が見えなくなってるだけで、かえって不自由になってるっていうことがあると思う。

自分達を映す場所

▲公園ができてから、いろんなことがあって、つくづく思うのは、公園って、良くも悪くも「地域を映す鏡」みたいなもんだなということ。普通はゴミでもなんでも私達の目の届かないところで処理されてしまうし、あらかじめいろんな禁止があるから、問題そのものが見えてこないけれど、くさっぱら公園をこういう場所にしたこと、いろんなことが目に見える形になってる。

●そう、それが人の気配になって、この場所の魅力をつくってる。桑の木を折っちゃったけど、縄で巻いて治療した痕とか、子供達がままごとした、そのまんまとか、誰が持ってきたのか、こわれたトランポリンとか…。何が片付けるべきゴミで何がそうでないか、それって、けっこう見解に個人差のある微妙な問題なんだよね。

▲時々「せつかく、住民参加で公園を作ったのに、その後荒れはてちゃって評判悪い…」って話があるけれど、誰がそう思っているのか、ということはあるな。

●そう、「くさっぱら公園」だって、「おー！なかなかいい雰囲気になってきた」と思っていると、「あそこは荒れてて、危ない。汚い。」という人もいるものね。

その違う感覚や考えをどう調整していくかは、やっぱり住民自身の問題で、役所におまかせにできるものではない。

■行政が中途半端に調整しようとする、どうしてもネガティブなほうの意見を取りがちだし、可もなく不可もないつまらない空間になる。ぼく達が「苦情は直接顔をあわせて解決していきたい」と言っても苦情は匿名で役所に行くし、行政は「詳しい内容は教えられない」というもどかしい思いをずいぶんした。

*くさっぱら公園ひろばの会 **大田区公園課

●そういうことが見えてくる場所があって初めて、「ああ、この問題は気長に付き合うしかないな」とか、「公園に現れているのは、教育や社会やいろんな問題とつながってるんだ」ということが分かってくる。

それに、ちょっとボルテージが下がってる時は、なんか本当に荒れた感じになる。「場所」はナマモノなんだなあ、こちらの有りよう次第でどうにもなる。そこにある風景を作っているのは、私達の日常なんだね。

「あたりまえ」のことがかえってきた

▲ぼく達もはじめから今みたいなこと分かってやってるわけではなく、いろんなことがあって、その都度、「どーしょ」「困ったね」とか「なんかヘン」とか考えながら、やってきて分かったこと多いよ。

●そういえば、初めて公園清掃をした日のこと、忘れられないなあ。何故かという、清掃っていうのは基本的には「良いこと」で、誰からも咎め立てされる故のないことなのだけれど、実際にやってみると、何か妙なというか、「こんなことしていいのかな」なんて、かなり屈折した気分。つまりさ、今まで私にとって「公園」って、手を加えてはいけなかった場所だったんだあって、気がついた。

■だからさ、公園の企画書で、「ここは、手を加えて変えていける場所にしよう。だから、完成はない。ずっと作り続けていく」とやったことが、結局一番大切だったんだよ。

●最初に公園課に電話した時も「なあんだ、意見言ってもいいんだ!」という単純素朴な驚きがあった。それが、「よし!やろう」ということにつながったのだけど、後で考えれば、なんでそんな当り前のことを「意見は言えない(あるいは言っても無駄)」と思い込んでいたのか。生まれたときから当り前のように、場所や制度があって、そこが自分たちのものという意識はなかったんだと思う。

▲ダメと言われてないことまで、自己規制が働いてる。このほうが正面きっての禁止より問題あるんじゃないかな。公園できたてのころ、子供が「ここで〇〇してもいいの?」って何度も聞いたよね。このごろ言わなくなったけど。

■逆に「ここでは何でもしていい」場所だっていう勘違いもされる。そんなことは決してない。

●「くさっぱら公園」と関わることで、結構本気で自分たちの身近にどんな場所が欲しいか。そこで何をしたいのかを考えるようになった。

それで、もともと、ここは、自分たちの場所なのだ、決めるのも使うのも自分なんだという、当り前のことにやっと気がついたという気がする。

▲でも、世の中見回すと、その当り前があたりまえでない。すべて「おまかせ」の場所、きれいに管理されている場所には「余地」みたいなのがなくて、あんまり関わりを持ちたいという気にならないのかもしれない。それは、良くで

きすぎたワークショップとかデザインも同じだと思う。それが「住民参加」という手続きを踏んだものであってもさ。

場所の力

●このごろ「くさっぱら公園」は「場所の力」が強くなってきたと思うんだけど。

■そう。まず、最初に予定地を見たとき、木もずいぶん残っていたし、それはもう、みごとなくさっぱらだった。それが「やろう」という気持ちを触発したんだと思う。

いろいろ考えて工事したら、なんだかぜんぜん思い描いたくさっぱらと違って、みんながっかりしたよね。その時は、「くさっぱら公園」でこんな場所なんですって必死に言わなきゃ、みたいな感じだったけど、このごろは、説明よりも「まずは、公園の現場を見てよ」と言いたい。

▲場所が雄弁になってきた。言葉ってある方向性をもっちゃうし、なんかえらそうになっちゃうけど、この場所にはいろんな痕跡が刻まれていて、物語もあって、その気になればいろんなこと読み取れる。その上で、ここが「好き」になってもらえるのが一番うれしいな。

●これはいいことですから広めましょうみたいなのはいやだね。これもよく誤解されるのだけれど、「子供の遊び」のための運動でしょと言われる。そうではなく、大人も子供も本気で遊ぶ。それで愉快になる。どんどんここが好きになる。そういうのが近所にあるの楽しいよ。

■よく、あなた達がいなければできないでしょっていわれるけど、自分がいるからこそできることやらなきゃ面白くないよ。だからさ、ひとつの「やり方」を雛型にすると、それに、役割をあてはめていくみたいになって、遊びが仕事になっちゃう。たとえば、「今月のくさっぱら」という通信を発行し、運営会議やワークデイなんてのもあるけど、それやんきゃ「住民参加の公園」できないと思うと義務になっちゃう。

▲皆、各々自分の職業があるから忙しいけれど、だからこそ場所というきずながあるのはすごくいい。この前も、栗の木がシロスジカミキリで少し枯れて、慌てて夜中や早朝にミーティングをした。改めて、「ああ、みんなこの木が好きだったんだな」って思った。

●雑草の種蒔いて育てたり、トイレの屋根の上に池つくっちゃったり、そういう試行錯誤のなかから、自然ってスゴイ!という発見がいくつもあった。

ここが完成した場所でない。変化や驚きがあって、ゆっくりと自分の居場所を自分で探せる場所だから「関わりつづける」ことができるんだね。

「なにかやりたいな」という気持ちをゆっくりと触発し続ける場所の力を信じたい。

(注●▲■は特定の個人の発言ではなく、こんな雰囲気です活動しています。)

大田区の公園整備・管理の状況

大田区は、「大田区基本構想」の目標である「安全で快適な活力と思いやりのある文化，福祉都市」を実現しようと実施計画が策定されている。

公園の新設については，区民一人あたり，6㎡を目標（現在3.54㎡）に，毎年度10,000㎡の新設，増設を行っている。

現在の公園の箇所数は，500箇所を越え，運動公園，総合公園，地区公園，近隣公園は，12箇所と極端に少なく，多くは，街区公園である。臨海部には，13箇所の海上公園がある。

内陸の特徴的な公園として，中世から景勝地であった洗足池公園，梅の名所の池上梅園，昭和40年代いち早く産業廃棄物のタイヤを使ったタイヤ公園やガラクタ公園，運河を埋め立てた平和の森公園などがある。

規模こそ違おうが，平成4年の3月には，企画から管理運営まで一貫して住民参加の形態を取り入れた「くさっぱら公園」が仲間入りした。

公園整備の手法

整備をする多くの公園が，身近な街区公園であることから，設計のポイントとして周辺地域の特性，周辺の公園の整備状況，拠点やエリアとしてのまちづくりの上位計画などを考慮して，素案を作っている。

住民参加の方法については，町会，自治会，PTAなどの既成地域団体に呼び掛けたり，ワークショップ方式で参加者を募ったり，「くさっぱら公園」の場合のように，公園整備のための新たな団体を発足したりさまざまである。

最近では，公園予定地の段階で，立て札を立て，公園づくりの担当の連絡先を入れ，不特定多数の意見も受け入れる方向で対応している。

管理運営における住民側との役割分担について

管理運営のかかわり方も公園によってさまざまである。一般的には公園管理人制度があり，公園の整備の不備の連絡や子供への遊びの指導などが制度としてとられている。また，防犯や施設利用の関係で，自主管理をしている公園もある。

「くさっぱら公園」の場合は，企画，設計の段階から，地域の住民の皆さんが中心となり，管理，運営に至るまで主体となった形態をとっている。

「くさっぱら公園」を管理，運営している「ひろばの会」は，公園を中心として，自然回復と子供の遊びの回復を両

立させ運営することによって常に地域の人間関係を生き生きとした創造的にしていきたいとの願いを込め運営されている。

住民参加の方法には，色々な形態があるが，基本は，自分たちの街（地域）は，自分たちで運営していくという情熱と実行力そして継続していく力が大事である。

しかし，もっと大事な事は，精神論ではなく，公園を空間としてどう楽しむか，子供達のためにどんな企画をたてようか。とか，作業の後の語らいやお酒がおいしいとか，そんな日常的な動機でボランティアは長続きするようになる。

今後の課題について

余暇時間の増大や市民意識の向上，生活環境への関心の増大から，公園を企画，立案し，整備し，管理を行なうのは，行政の仕事という時代ではなくなり，企画，立案の段階から，色々な意見が出される時代となった。

また，公園という施設の特性から，公園施設の要件を満たせば，幅広い公園施設の形態が展開できる。管理についても同様で，剪定，除草の問題から，マナーの問題まで，色々な意見がある。今迄，管理効率を高めるため，清掃作業，剪定作業，遊具の点検，整備，管理運営に至るまで個々に委託化され，利用する市民と管理する側が直接顔の見える関係から遠くなってしまった。また，住民同士のコミュニティも希薄になっている。

その中で，公園を舞台として，地域で色々な議論をし，自分たちの地域は，自分たちで対応していく自治意識が大切である。行政側も基本的な部分の標準化や効率化は大いに進めながら，また，公共施設としての公平性を保ちながら，公園の管理・運営を地域に委ね舞台裏にまわって，地域を支援する役割を担う事が大切であると思う。

「くさっぱら公園」の事例が，レア・ケースになってしまいうのかモデル・ケースになるのか見守っていきたい。

これまでの経過（ひろばの会制作の資料より抜粋）

- 91年5月末 石丸さん，下中さんが公園予定地の立て札を見て，公園課に電話。
- 6月初 地域の3つの町会を訪ねて，会の主旨を話す。
これは，公園が，ちょうど3つの町会の接点に位置していたため。三町会とも，おおむね好意的な対応だった。
- 6/19 厚木市に「きずなの森」という，市民による雑木林の回復の試みがある。仕掛け人である神奈川県林業試験所の研究員，中川重年氏を招いて，学習会を持った。
- 6/22 公園予定地に入って遊べるという，大田としてはおそらく異例の措置が取られることになり，そ

の準備として、公園課職員、ひろばの会、および子供達、計30人ほどで、予定地の小石や瓦礫を拾った。拾い物自慢会をして楽しむ。

以後、10月末のはらっぱまつりまで、現場で楽しみながら考えることができたことは、大きな力になった。

- 6/28 現場説明会。公園課、設計業者、3町会、隣接する保育園、ひろばの会が参加。いろいろな要求が出されたが、ひろばの会と保育園の要望は、ダスト舗装をしない、木や草を生かす、など共通する部分が多かった。
- 7/16 24ページに及ぶ企画書を公園課に提出。会の公園についての考え方がようやく明確になった。
- 8/20 設計検討会。公園課、設計業者、町会、保育園、広場の会。公園課から出された資料はB4版23ページ。「みんなで公園をつくりませんか」というタイトルがつけられている。
- 9/12 最初の説明会も含めると、3回目の設計検討会。池と流れは、技術的な問題から、当面は見送りとした。将来、作る可能性はある。
- 10/19~25 はらっぱひろばくさっぱらまつり。イベントは初めの3日間。後は展示。箸作り、食べ物作り、プレーパークのスタッフを招いてスライドとお話、公園課の方を招いて管理運営についての話、地域のお年寄りから昔のこの辺りの様子、「きまぐれ座」の二人芝居、野外映画会、遊び歌バンド「あかあおきぐみ」の演奏、など盛り沢山。森雅敏さんの50点のはらっぱ椅子は、予定地を生

き物の気配で包んでくれた。

- 11/11 最終的な図面があがり、現場での説明。工事が始まる。
- この間、管理運営、とくに清掃をどうするかについて、ミーティングを重ねた。

みんなでつくろうひろばの会

（'91年ひろばの会制作の
パンフレットより抜粋）

● 大田区千鳥一丁目の住宅街の中に、1300㎡、400坪弱の小さな公園が、この4月に開園します。

地面は舗装せず、土のまま。既成の固定遊具は置かない。草や木を活かした、「はらっぱ」みたいな公園です。管理運営には行政と住民が協力して当たり、建設時の状態を維持するのではなく、だんだんに手を加え、変えていくことを前提にしています。本当の公園づくりは、これから始まるのです。

● 私たち「みんなでつくろうひろばの会」は、建設計画が発足した昨年5月、地域の人々が声をかけ合って生まれました。現在、会員は30名ほど。いろいろな立場の人が、いろいろなやり方でかかわれる、はらっぱみたいな会を目指しています。

● 「ひろばの会」が目指す公園は、次のようなものです。

- 1) 草や木、そこに住む虫や鳥などの小さな生き物たち。そういう身近な、小さな自然をとりもどしていきたい。
- 2) 穴掘り、泥遊び、水遊び、木登り、虫捕りなどの遊びができる、「禁止」のない、自由に生き生きとした空間を作る。
- 3) 種を蒔く、木を植える、道具を手作りするなど、使う人が手を加え、変えていける公園にしたい。

この「変えていける」ということには二つの意味があります。

一つは、自然回復と子供の自由な遊びを、都市部の小さな公園で両立させるのは非常に難しい。そのためには、常に試行錯誤できることが必要な条件だということ。

もう一つは、そういう手間のかかる公園との関わりを通して、地域の人間関係を生き生きとした、創造的なものにしていきたい、ということです。

● この公園作りについてくる、手間やトラブルを、避けるのではなく、むしろ楽しんでいきたい。

この数十年の間に、私たちは多くのものを失ってきました。身の回りの小さな自然、トラブルと微笑みのあるあたりまえの人間関係、子供達のしなやかさとたくましさ。

手間を省くことで失ってきたそれらのものを、手間ひまをかけてとりもどしていくことが、この公園づくりの本当の意味だろうと考えています。

くさっぱら公園完成平面図

案内図

園名	くさっぱら公園
位置	大田区千鳥1-1-3
面積	1,299.60㎡
開設年月日	平成4年3月31日